

## 序 文

須賀川市立博物館の刀装具コレクションは、市内馬町に在住された青津保壽氏が、大正時代初期(1912年)から70年にわたって収集・研究されたつば 鐺、こづか 小柄、こがい 筭、めぬき 目貫、ふちがしら 縁頭などのコレクション624点を、昭和56年(1981年)須賀川市に寄贈されたものです。

本コレクションは、鎌倉時代から江戸時代までの逸品をそろえ、鐺の系統、金工家の系図を網羅した刀装具コレクションで、全国屈指のものと高い評価を受けています。

これらの刀装具をみますとき、今更ながら青津氏の炯眼と地域文化の振興のために、貴重な資料を寄贈されたその御好意に対し、深い敬意と感謝の思いを新たにするものです。

日本の刀装具は刀剣とともに歩みました。古墳時代後期の6、7世紀ごろに作られたと考えられる、わが国固有の「かぶつちのたち 頭槌大刀」があります。この大刀に金銅製のとうらんがた 倒卵形をした鐺が付属していますが、これにていけい 梯形の透かし彫りを施したものや、地に線刻の文様や金、銀の象嵌を施したものがあります。このような鐺はわが国独特のもので、ここに日本の鐺工芸の源をみることができます。

刀装具には、鐺、小柄、筭、目貫、縁頭などがありますが、それらが組み合わされてはじめて刀装の美しさを発揮します。刀装具の中にあつて鐺は特に見どころが多く、鐺一枚をとつても素晴らしい美術工芸品として鑑賞されています。

このたび、須賀川市立博物館開館30周年記念収蔵資料企画展「武士の装い 刀装具の世界」の開催にあわせて、『青津保壽刀装具コレクション』の図録を刊行することといたしました。

本書が、日本の美の一典型である刀装具の芸術を理解するうえで、その一助となれば幸いです。

2000年10月

須賀川市立博物館長 横山 大哲